

## ルワンダの農業職体験および食料事情調査

生命環境科学研究科 生物圏資源科学専攻  
博士後期課程 2 年 武井 瞳

### 1. 渡航先・期間

モザンビーク (2019 年 11 月 3 日～2019 年 11 月 8 日)

ルワンダ (2019 年 11 月 10 日～2019 年 11 月 25 日)

### 2. 背景と目的

私は将来アフリカの途上国農業に資する研究者になりたいと強く望んでいたが、これまで現地の食料事情の具体的なイメージが持てず、途上国の農業が抱える問題点や本当に必要な支援を見つけることが困難であった。本インターンシップでは、**途上国農業および食料関連の現場の理解、並びに外国語によるコミュニケーション能力と国際性の向上**を目的とし、アフリカの途上国に滞在して食料関連事業の現状調査および農業職業体験を行なった。

### 3. 実施内容の概要

まず、アフリカの途上国の農村支援の課題とその解決方策の提案に重要となる視点を養う為、モザンビークで農村開発支援事業を行う企業と、支援を受ける農村住民への聞き込み調査を行った。また、農業生産と作物流通の仕組みの抱える課題を把握する為、農村の農家、農業資材店、仲買人の倉庫、国営商品取引所、集荷市場、健康食品生産者等の合計 12 施設を訪問し、現場の見学とインタビューを行なった。

その後、ルワンダの農家に 2 週間滞在し、農作業を行った。12 種類の作物の生産現場の現状を把握し栽培上の課題発見から課題解決方策の考案までを行うのに加え、2 箇所の食品加工施設および 3 箇所の市場で見学とインタビューを行い、加工・流通の現場からの農作物への需要も調査した。さらに、若年層の食の嗜好と栄養状態という観点からの農作物への需要を探るために、近隣住民と孤児院の児童ら合計 30 人以上を対象としてインタビューを行った。

### 4. 得られた成果

**【現状の理解に対する成果】** 農村と流通現場での観察とインタビュー調査を通じて、日本では分からなかった農作物の具体的な栽培管理方法や、作物流通の仕組みを学ぶことができた。さらに、生産・流通・消費の現場の抱える課題と、それらを踏まえた農業上の需要を考察することができた。また、ルワンダの食品加工施設において、ルワンダ人の健康増進に寄与する作物研究の構想を自ら社長に提案し、今後の共同研究への賛同と材料提供の許諾を受けることができた。

**【コミュニケーション能力と国際性の成長に対する成果】** 渡航準備期間からの現地人とのやり取りを通じて、自身の希望を英語で的確に伝えるコミュニケーション能力と、互いの事情を理解しながら落としどころを見つけていく国際的な計画策定能力が身についた。また、人種も教育的背景も全く異なる外国人との寝食を共にした農業生産を通じて、現地の風習や考え方を深く学び、国際理解に繋がった。さらに様々なインタビューを通じて、語学力 (英語、フランス語、ルワンダ語) や英語の通じない環境でのコミュニケーション能力が向上した。

## 5. もうひとつの成果 - 打ち砕かれた自信 -

インターンシップで得られたものは、上述した美しい成果ばかりではなかった。日本には想像だにしなかった途上国の現実、農学を通じた支援の限界、そして自分の弱さに気付かされた渡航であった。アフリカに渡航する前の私は井の中の蛙で、途上国の飢餓や貧困に対して自分が何かできるような気持ちになって、大学入学前から抱いていた「最先端技術を用いた品種改良でアフリカの土着作物の高収量化と高栄養化を実現したい」という夢に突っ走っていた。しかし現場を目の前にして、自分ができることの限界を痛感した。

渡航期間中、当初の目的であった「途上国の農業が抱える問題点や本当に必要な支援」を見出そうと行動すればするほど、頭を動かそうとすればするほど、答えを見失い暗礁に乗り上げた。逃げたくもなかった。現地の貧困や飢餓の本質的な原因を掴めないと、長期的に意味のある支援は出来ないと感じた。また、その国の人の生き方、働き方、リアクションを深く理解しないことには必要な支援の方向性さえ分からないと学んだ。さらに、その地の農家コミュニティとの直接の信頼関係がないと、現場で何かを始めたりに関わったりするのが極めて難しい土地柄であると知った。例えば、先進国の技術で改良し高栄養化したバナナ品種をルワンダに導入しようとしても、農家に新品種の作付けを促す際に、日本の想像以上の個人的な信頼関係が求められる。また、新品種の要求する栽培管理がルワンダ人の許容範囲外であれば、品種は普及しない。そしてそもそも、自国の農業が抱える問題点を途上国の住人が自ら発見し解決していけるような教育システムの改革の方が求められているのではないかとも思えてくる。兎にも角にも、途上国にとって意味のある支援の実現には、数年間現地に住み現場に入り浸って理解を深めると同時に、人脉を形成し問題の本質を見つめる必要があり、渡航前に思い描いていたようなエアコンの効いた先進国の研究所に入り浸っての研究開発では到底不可能なのだと気付かされた。

また、途上国に確かにある日常の中で数週間生活し、日本人の価値観ではとても受容し難い現地の「当たり前」の理解に努めた挙句、先進国基準で現地の幸せ不幸せを押し量り生活レベルを引き上げようとする我々の傲慢さに疑問さえ抱いた。支援と銘打って途上国の現状の一端を変えることは、それまで現地で受容されていた日常を少なからず壊すことである。どんな支援も諸刃の剣であり、意味のあることをしようとするれば敵を作ることは避けられない。方策を誤ると貧富の格差を意図せず広げる結果になったり、変化により生じたもつれを解消するための武力抗争が起こったりしてしまう。モザンビークで途上国支援に関わる人々と話すなかで、日本や国際機関の支援が現地にもたらした光と影を知り、ここは部外者が生半可な気持ちで介入すべき場所ではないのだと肝に命じた。そして現地の平穏を壊すリスクとその責任を負ってまで途上国支援に関わる覚悟が私に本当にあるのかと、今日（帰国3週間後-本報告書の提出締切日）に至るまで毎日自問自答を続けているが、いまだに答えは出ない。



モザンビークの農家



ルワンダの子供達